



2007年(平成19年)
5月号(No. 744)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

日本山岳会への提言

大学山岳部に支えられた日本山岳会と今後……………	1
『日本山岳会百年史』の編集を終えて……………	4
アメリカ山岳会の名誉会員に推荐されて……………	5
新名誉会員ハルシュ・カパディア氏の来日について……………	6
活動報告……………	7
図書委員会……………	
東西南北……………	8
韓国の山と書物……………	
高タトラ山地の山……………	
図書紹介……………	10
図書受入報告……………	11
会務報告……………	12
ルーム日誌……………	13
会員異動……………	13
新入会員……………	14
INFORMATION……………	15

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時

日本山岳会への提言 大学山岳部に支えられた 日本山岳会と今後

宮崎紘一

高齢化が叫ばれて久しい日本山岳会であるが、100年の歴史ある山岳会を支えてきたのは、大学山岳部出身の若い人たちであった。現在の大学山岳部の窮状を考察するとともに、いかなる方策が考えられるかを東京農大OBの宮崎紘一氏に綴ってもらった。

創立100周年記念事業を終え、未来に向けて新しいスタートを切った日本山岳会にとって、課題のひとつに次世代を担ってゆく人たちの育成がある。現在の山岳会があるのは大学山岳部出身の人たちの功績が大きい、未来を託すべき大学山岳部と日本山岳会学生部の現状を、私の関わってきた経験の範囲内で記して大学山岳部を少しでも理解していただければと思いい、大学山岳部と日本山岳会学生部についてまとめてみた。

大学山岳部の衰退が話題となつて久しい。この間多くの山岳関係者が退潮に歯止めをかけるべく

努力を重ねてきたが、一向に改善されず結果はご存知のとおりである。原因についていろいろと見られているが、抜本的な解決策の見出せないまま今日に至っている。多くの大学山岳部で部員の確保ができず廃部となつてしまい、日本山岳会に団体加入していた大学山岳部も消滅、会から除籍される山岳部が後を絶たない。この状態は一時的な衰退とは言いがたく、隆盛を誇り登山界の牽引車であつたかつての大学山岳部も、大学のおかれていた状況の変化に伴い、往時の山岳部のままでは存在し得ない時期にきていると言えよう。

社会状況や若者の登山への関心の低下が山岳部員減少の原因であるが、登山状況の変革も見逃せない要素だと思われる。インターネットに代表される情報の氾濫、交通網の発達、登山道や山小屋等の整備、登山用具の進歩などが、本来、若者の心を揺さぶる山の魅力を減じさせているのではないかと、さらに登山界のレベルの上昇は著しく、国際的に注目される登山のレベルに到達するには、今話題の特待生制度(問題もあるようだが)でもないかぎり難しく、大学山岳部が目標を見失つて低迷する要因のひとつとなっている。

大学生の置かれている状況は厳しく、授業を長期間はなれての登山活動が行ないにくくなり、部員の登山可能な日数も極端に少なくなっている。部員の減少とあいまって、往時の30~40日間などという積雪期合宿は望むべくもない。ひとところの3Kといわれ敬遠され

た時期と状況は変化してきて、親の反対により入部を断念するという学生は少なくなっているように思われるが、少子化による影響は受けていると思われる。

とはいえ山登りの奥は深く、国内の山でも、時間がなくても魅力的な登山は考えられると思うが、その域に達するまでの入口の部分で、今の高校生たちの登山経験の浅さが大きく影響していると思う。

私の関わってきた東京農業大学山岳部の実情を例にとって考えてみよう。1980年代に、部員の



5月の八海山で、雪上訓練する山岳部員

減少に苦勞する状況が始まり、すでに20年続いていることになる。

その間には4年生部員が卒業すると部員がいなくなり、廃部に追い込まれる危機的状況の時期もあり、幸いその部員が留年したことにより救われたこともあった。当時の監督が苦肉の策で、部員確保の方策としてカヌーによる川下りなど山登り以外のアウトドア活動を取り入れたこともある。また女子部員を積極的に勧誘したりして部員を確保する一方で、監督自ら合宿に参加し、部室には毎日顔を出し、トレーニングに精を出し、部員以上の活動をしていたこともあった。

しかし、簡単には山岳部員が増えることはなく、不安定な状況は改善できなかつたが、部活動を支えるかたわら、若手OBを海外登山の計画に誘い出し実行していた。

1986年、中国崑崙山脈の7167¹峰の初登頂をきっかけとして、次々に海外登山を経験するOBが現われ、農大山岳部単独で8000¹峰登頂を目標にできるようになった。若手OBの活動に引っ張られるようにOB会もまとも、山岳部も落ち着きを取り戻

し、少しずつではあるが部員が定着していった。

少人数の部員を助ける意味もあって、海外の高所登山を経験した若手OBが年間を通じ全合宿に参加し、山岳部員と行動をともにすることで部のレベル低下を阻止することもできた。山岳部の学生たちが先輩たちと山行をともにすることで、登山の目標を具体的に持つことができたことは、山岳部の活性化に大いに役立った。こうして少ない入部者を部に引きとめて部活動を続け、OBとなつてから海外の高所登山を経験し、山岳部の学生たちを指導するという循環ができていった。

入部希望の学生が少ないときは、部員を大切にあまり指導する側が臆病になりがちである。しかし、若手コーチを交えたよい意味での上下関係と、妥協しない指導で次々と合宿をこなしてゆく積極策がよい結果を生むという信念の



1986年、農大山岳部が初登頂した崑崙山脈最高峰、7167¹峰で

もとで、山岳部・OB会の運営を続けて成果を残してきた。

だが、遅まきながら社会状況の変化は若手OBにも厳しくなり、海外登山の経験を積む機会はおろか自分の志す国内の山登りも思うようにできないOBがほとんどになってきている。合宿に参加する時間的余裕のあるコーチがいなくなると、コーチが関わるることによつてできあがった山岳部の循環が

崩れてくると思われる。刻々と変化してゆく山岳部のおかれている状況にどう対応していくかが、私たちの山岳部に課せられた課題であろう。これまで数度の大きな遭難事故を経験し貴重な人材を失いながら続けてこられたのは、大学当局の理解と農大の家族的な学園環境と山岳部OB達の情熱の賜物（たまもの）であった。だから、新しい問題も解決策を見出し出していけるものと信じている。山は、同世代の青年たちが文字どおり寝食を共にしながら頭脳と身体能力の限りを尽くして目標に向かっていける数少ない場なのだから……。

現在の日本山岳会では、団体会員となっている大学山岳部を中心に東京近郊の山岳部で構成される学生部をおき、その学生部をバックアップする形で学生部指導委員会を設けて山岳部どうしの交流や情報の交換の場としている。学生部は定期的に会合を開き、先輩の登山情報やそれぞれの部活動の情報交換をしながら、部員の少ない山岳部に協力して部員募集を助け合ったりしている。

学生部指導委員会が海外登山を

積極的に応援しており、複数の大学山岳部部員が海外の山に合同チームを作り、登山を続けている。

メンバー全員が現役の山岳部員で挑んだ、1998年、ブータン「5725峰」以来、2004年、ネパール・ムスタンのチブヒマール、2006年、ネパール・マナスル山群のパンバリ・ヒマールと、「未知の地域の未踏峰へ」というコンセプトの登山を続けている。チブヒマールとパンバリ・ヒマールは初登頂を果たしている。その間1999年には中国の学生たちと日中友好登山隊を組織し、雪宝頂に登頂した。以来、近隣国の中国・韓国の学生との交流も続けている。

これらの活動の基礎として、科学委員会が行なったマッキンリーの気象観測隊に学生たちが参加し、海外の高所登山経験が後に続く一連の登山のきっかけになった。最初のブータン隊は、マッキンリー隊のメンバーが主軸になったが、次からは連続の参加者はなく大学も別な者がほとんどで、個人の経験の積み重ねではなく組織の経験の引き継ぎで実行されている。その意味では、学生部の仕組みが新しい伝統として定着しつつあると

思われる。

また、マラソン大会という名称で続いている皇居内堀通りを舞台として行なわれている長距離ランニング大会は、43回を重ねて続いている。多いときは参加人数が100名を越すときもあり、山岳部学生の数の認識を新たにすることもあるが、部員の人数が足りずチームで一緒になったことをきっかけに合同チームを組織し、団体戦に参加するチームもあり、和気藹々のレースを展開している。この大会の魅力のひとつが、個人戦と団体戦の勝者はもちろん参加者に贈られる賞品で、役員の学生た



毎年、皇居で行なわれるマラソン大会の表彰式

ちがスポンサーにお願いし、その厚意で集められたものである。毎年、不慣れた学生たちが賞品集めに奔走しているが、礼を失した対応でしかられることもあるという。この大会の表彰に現在使われているカップは、大学山岳部のOBの親睦団体であるメトロロカから贈られたものである。

今の問題は、大学を卒業し就職したほとんどの学生たちが日本山岳会と縁が切れてしまうことである。以前は若いOBたちが青年部に所属して山岳会を支える会員として育っていったのであるが、彼らを取り巻く環境の変った現在でも彼らに頼ったままでよいのか考える必要がある。卒業後、次に山岳会に現われるのは会社を定年となった40年後というのではあまりにも寂しい。華々しい海外登山は無理でも、山登りとは縁の切れていないOBも少なくないはずなので、同じ問題を抱えた仲間を探せる場としてでも日本山岳会を活用できないだろうか。ルームをそんな集まりの場とすることができたらと、夢に描いているのだが、いかがなものだろうか――。

『日本山岳会百年史』

の編集を終えて

松田雄一

編集委員会の発足(成り立ち)

『百年史』の編纂を最初に提案したのは、創立80周年当時の佐々保雄会長である。当初からその構想を秘めていた望月・織内両名譽会員も、将来を考えて『山岳』に「資料ノート」を書き残していた。

1993年10月、創立90周年記念事業委員会の席上、「百年史編纂委員会」を設置することが提案され、中村純二副会長が世話人となり発足した。メンバーは望月、織内、南井、中村(純)、松丸、岩渕、松田、中島の8名。その後、中島寛が委員長に就任、最も相応しい適任者であった。中島の示すスケルトンに基づき通史を執筆してもらうことで、順調に推移するものと思われた。なお、その体制を支援するために、上北、南川、水野、五十嶋、三井、松村、保坂、馬場、松本、児玉(茂)、川俣、高遠、児玉(俊)らが増員された。

中島寛委員長の急逝による再編成

1998年10月、療養中であった中島委員長死去の報に接し、委

員一同愕然とした。中島は、病床にまでパソコンを持ち込み、百年史のデータ整理を最後まで行っていた。その姿に涙した。織内顧問からは、「早く中島にかわる通史の執筆者を決めて活動を再開すべきである」とのアドバイスも受けたが、中島の代役はいなかった。

2002年5月の委員会で、「百年史の原稿は三十年史、五十年史の延長ではなく、百年の時点での時代背景を踏まえて新たな視点でまとめる。通史は1人で書き、他の委員はそれぞれの分担したテーマごとに縦の歴史を書き、これを補完する」という方針を確認した。その後、通史は水野委員が書き、全体の編集は南川委員がまとめることを決めた。この時点で、残された期間は4年間であった。

高齢化と時間との闘い

02年8月、望月顧問が急逝、9月には織内顧問も逝去された。さらに委員会の中では唯一の専門家として参画されていた岩淵委員が急逝された。中島、上北委員と合わ

せて5人のメンバーを失った。意気消沈の委員会であったが、迫り来る期限に迫われながら「年表小委員会」を設けて編纂に当たった。

しかし、年表に採録する事項についての選択基準など、小委員会のメンバー各自の史観が異なり、難渋を極めた。期限も迫り、最後には保坂委員を煩わしてまとめてもらったが、最後まで苦労したテーマであった。

通史のまとめにも時間がかかった。これも、高齢化によるもの忘れ、集中力の低下が原因であった。つきつめていえば、近代アルピニズムの終焉に象徴される先行きの見えない将来展望が、ストレスの原因になっていたのかもしれない。今後の課題として残されたもの

最後まで残った未完の原稿に「本会資産の推移」「図書室の歴史」「ヒマラヤ登山に果たした本会の役割」などがある。本会所蔵の絵画、貴重な資料も公表できずに終わった。これら未完の原稿については『山岳』に補遺として掲載し、各種資料については、製・合本して図書室での閲覧に供したい。このほか『百年史』で当初の計画にありながら、できなかったもの

のに、索引、英文目次、主要文献目録がある。少なくとも英文の目次は入れるべきであった。最後に

10年を超える歳月は長かった。編纂委員会というチームで『百年史』の編集を担当してみても、最も大きな誤算は、委員各位の高齢化であった。若い頃、ヒマラヤに向かつて仲間と燃やした情熱は続かなかった。その間、多くの先輩や後輩を失い、明日はわが身と感じながらでは根気も続かず、能率もあがらなかった。

それぞれ歴史観の違う人間が、同じ気持ちで、原稿をまとめるということ自体が、所詮は無理なことであった。その上、これから10年先の登山界の姿を念頭に原稿を書くという無理な作業に、ストレスがたまるのは当然であった。

無理を承知で『百年史』という山に、共に登ってくれた南川委員はじめ委員諸兄姉に、改めて感謝の意を表したい。

最後になりましたが、以上のような経緯があったとはいえ、『百年史』の刊行が大幅に遅れ、会員各位にご迷惑をかける結果になりましたことをお詫びいたします。

アメリカ山岳会の名誉会員に推挙されて

中村 保

3月末にオレゴン州ベンドで開催されたアメリカ山岳会の年次総会において名誉会員に選ばれました。日本人としては横有恒以来2人目で、アジアでは4人目です。老年探検家にとってこのうえない栄誉です。

ベンドはオレゴン州中央部のスキー、ゴルフ、ロッククライミングのリゾート地です。総会には全米から250名が参加しました。

メインイベントの一つとして「気象変化」をテーマにしたシンポジウムが催され、私は「東ヒマラヤの氷河」についての近年(30、50年間)の氷河変動を写真・地図・衛星画像を使って報告しました。

晩餐会での表彰にあたり、ジム・ドニニ会長、アメリカ登山界の重鎮で知日派のニック・クリンチさん、ビル・パトナム名誉会員による紹介がありました。英文ジャーナル (Japanese Alpine News) エディターの仕事にふれ、名誉会員推挙の対象として東チベットの未踏域「ヒマラヤの東——チベット

のアルプス」での17年間のパイオニアワークが説明されました。探検と登山に対する関心・評価が日本とは違うようです。踏査なら未踏域、クライミングなら初登頂が置かれます。これは米英に共通していることです。

アメリカで私の業績が認知され始めた直接のきっかけは、『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』が2003年号で「ヒマラヤの東」をカラー30ページで特集してくれたことです。編集長のジョン・ハリソンⅢとは親交が続いています。余談ですが彼はアイガー・デイレッティシマで悲運の死をとげたジョン・ハリソンⅡの息子で、最近『執念のアイガー』を出版しました。アイガー北壁直登を争う米英連合隊とドイツ隊との競合、友情と家族愛、クリス・ボニントンやドゥガル・ハストンなど多彩な登場人物が織りなす物語は感動的です。英国の『アルパイン・ジャーナル』にもほぼ毎年投稿を続けてき

ました。アメリカ、英国、インドでの講演も役に立ちました。英国アルパインクラブの2005年シンポジウムでは「ヒマラヤの東」がテーマとして取り上げられ、私がキーノート・スピーカーを務めました。そのおかげで英文ジャーナルが世界で一人歩きを始め、*East of the Himalaya-Alps of Tibet*の呼称が定着しました。世界への発信を通じて多くの友人とのネットワークができたことはかけがえない財産です。

英国アルパインクラブもそうですが、アメリカ山岳会の名誉会員の選考基準は業績です。昨年は『ヒマラヤン・ジャーナル』の編集長ハリシュ・カバディアさん、一昨年はカトマンズ在住のエリザベス・ホーリーさんが選ばれていました。アメリカ人以外の名誉会員を列挙してみます。クリス・ボニントン、クルト・ディームベルガー、モリス・エルゾーク、エドモンド・ヒラリー、ラインホルト・メスナー、ダグ・スコット、史占春など各国の代表的な登山家です。アメリカ人ではロバート・ベーツ、チャールス・ヒューストン、ニック・クリンチ、コンラッド・

アンカー、イボン・シュイナード、リン・ヒルなどです。

総会には第一線の著名なクライマーが多く参加しました。ステイプ・ハウスは前夜祭のメインスピーカーで2005年のナンガ・パルバット、ルパール壁のトークをしました。気鋭の若手ロッククライマーの出演もありました。一昨年JAC100周年記念祝賀会に主賓として出席した前会長のマーク・リッチー(49歳)さんは今年の6月、カラコラムの難峰ラトック1峰北壁の初登攀に挑みます。会員の平均年齢が65歳の日本山岳会と同じように、アメリカ山岳会も高齢化はしていますが、老・中・青のバランスがとれていて活力があります。



アメリカ山岳会の年次総会で講演する中村保氏

新名誉会員ハリシュ・カパディア氏の来日について

坂井広志

ハリシュ・カパディア氏は、1945年7月11日、ムンバイ生まれのインド人。当会が平成18年11月ハリシュ氏を名誉会員に推挙し、このたびの来日となった。ハリシュ氏は英国山岳会名誉会員、アメリカ山岳会名誉会員であり、インド・ヒマラヤの山岳調査研究における第一人者である。ほぼ毎年、精力的にインド・ヒマラヤ各地の踏査登山活動を行なうかたわら、『ヒマラン・ジャーナル』の編集長として既に30年近く世界各国の記事を収集、発信し、その実績と著書等により数々の賞を受けている(2003年、英国国立地理学会賞、2006年、キング・アルバート一世山岳賞)。

今回の来日は三回目となる(1994年、1998年の来日は、日本ヒマラヤ協会の招聘)。当会との関わりは深く、特に2002年日印合同東カラコルム登山隊は93年ぶりのカラコルム峠到達、日本

人初のコル・イタリヤ通過、未達のテラム・シェール氷原踏査、パドマナブ峰7030メートル初登頂、と国際政治情勢悪化の時期にもかかわらず数々の記録を残し、成功裡に終わっている。これもハリシュ氏の企画提案と努力がなければ実現不可能な事であった。彼は次男を2000年、カシミール印パ紛争により亡くし、その後東カラコルムの平和と環境保全活動が続けている。悲しい過去を持ちながらも、細やかな気配りと明るいジョークを絶やさない。来日は4月4日から12日で、東京、名古屋、金沢、松本、鎌倉を巡った。4月5日はJACルームで平山会長を表敬訪問、国際文化会館での来日歓迎夕食会は大塚前会長をはじめ氏と関係の深い山岳関係者21名が出席、大変盛会に終えた。6日は東京・四谷で最新ニュースのアルナチャル・ヒマラヤを含めインド・ヒマラヤ概要につ

いて講演をし懇親会、7日は名古屋、東海支部主催でカジタックスの工場見学、インド・ヒマラヤ一般についての講演会と懇親会。8日は金沢、石川支部主催のラダックを中心とした講演会と懇親会。9日から10日は東カラコルム登山隊メンバー、林原隆二会員の案内で上高地散策、大町山岳博物館、安曇野山岳美術館を見学。11日は私が鎌倉を観光案内した後、アメリカから帰国直後の中村保会員、ヒマランクラブ日本支部長でもある松田雄一会員と夕食歓談をし、翌12日に無事帰国された。しかし、今回、名誉会員という海外からの賓客を迎えるにあたり当会執行部の準備が不十分であったと言えよう。ハリシュ氏の来日と時を同じくして中村保会員はアメリカ山岳会の名誉会員になられ訪米、年次総会に出席し、最大級の歓迎を受けた」との事である。日本とインドとは戦前のナンダ・コート初登頂から始まり1976年ナンダ・デヴィ日印合同登山隊の初縦走など数々の輝かしい登山実績と交流の歴史があり、ヒマランクラブの記念式典に招かれる等々多くの会員が訪印交流をして

いる。さらに『ヒマラン・ジャーナル』の編集長としてハリシュ氏が日本人の海外山岳活動を積極的に記事掲載する一方、当会も『Japanese Alpine News』を通じて各国登山家、山岳会とのパイプがしっかり構築されつつある。個人的にハリシュ氏と親交の深い会員は多いが、今回は日本山岳会が会として招聘した立場である。日本山岳会の要望にに応えるべく講演に期待し来日した彼に対し、迎え入れる当会が国際マナーある対応であったか、疑問が残る。今後、当会が国際交流を積極的に展開していくのであれば、会として準備(事前周知、費用の捻出、支部との役割分担等々)の整え方がぜひ必要である。



4月11日、鎌倉の建長寺でのカパディア氏(右から2人目)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会

第37回山岳図書を語る夕べ

2月19日、18時30分より104号室において、薬師義美氏による『大ヒマラヤ探検史——インド測量局とその密偵たち』(薬師義美著)についての講演を開催した。参加者は約40名で、司会は平井吉夫図書委員長が行なった。

冒頭、最近インターネットの記事で京都出身という間違った紹介があったということで、訂正を兼ねて自己紹介をされた。薬師氏は富山県の黒部川扇状地にある朝日町の出身で、県立泊高校に入学し山岳部に入部、本格的な山登りを始めた。地元のある山である白馬岳、朝日岳、黒部川下流の沢やその周辺の山々で活躍され、大学時代より京都に在住されたという。

著者がヒマラヤ登山史探検史にのめりこんだきっかけは、諏訪多

栄蔵氏との出会いであり、深田久弥、吉沢一郎、望月達夫各氏との交流の中で醸成され、ご自身の思索好きと凝り性がそれに拍車をかけたようである。そして、数回にわたる現地踏査行、資料の収集、数十年にわたる研究の第一段階が今回の1冊になった。

深田久弥氏が登山史より探検史のほうが面白いと話されたこと、また、K・メイスンの『ヒマラヤ——その探検と登山の歴史』を読まれ、登山史の前にこんな探検史があったのかと感銘を受けられたようである。

フィリモアがまとめたインド測量局記録集について、全5巻あるが特に第5巻は貴重なものだという。これは中国とインドの国境問題でインドに不利な記録があるため、インド政府が回収した。現存しているのは数冊ということだ。インド測量局は、情報収集をパ



著書を手にも熱く語る薬師氏

ンディット (pundit) にさせたが、地図の作成は英国人が行なった。パンディットのチャンドラ・ダースは本職のスパイと言われているが、教え子の河口慧海は、ヨーロッパの定説ではやはり政府、または陸軍のスパイだった、と言われているが疑問がある。

シュラギントワイトのアトラスについては、日本にあるものは全部見たい。今までに三カ所のものを見つけたが、日本山岳会のもの(松崎中正氏寄贈)が一番上質のようである。松崎氏に感謝している。東洋文庫にもあるとの情報があったので、明日調べに行くと話された。

著者の本の定価の高いことについて、地図は39枚入れるつもりだった。カラーにしたかったが地図の版下が高価なため、結局8枚をカットしたことなどの事情に触れた。そして今回の夕べでは、8枚のうち4枚のコピーを出席者に配布していただいた。

表紙の装丁について、「植民地時代のインド測量局のエンブレムがあったので、本書に使っていただきたい」とお願いしたところ、うまく表紙に使っていただき、大変気に入っています」と話された。

国内外の山岳図書館を多く見てこられた著者は、山岳会図書室の拡充をひたすら希望されていた。

最後に質疑応答があり、雁部貞夫氏より、パンディットのことを情報収集者といえよいか、またスパイといえよいか、という質問では、密偵・江戸時代の隠密等をあげられたが、結局情報収集者がよいようである。日本人はスパイという言葉に何かしらの抵抗があるようだ。興味深い話であった。パンディットが活躍した時代に戻ったような時間であった。

(茂見 猛)

東西南北

韓国の山と書物

鈴木正規

韓国旅行の合間をみて、ソウル郊外の北漢山(836^{メートル})に登った。登山コースは全体的に整備されていて、緑化への努力や、ゴミを追放する運動などが目につく。自然保護にも関心が高いようで、登山コースの所々に自然保護を呼びかける立て看板が見受けられるのが印象的だった。

韓国の山々は、ほとんどが花崗岩の岩山から成りたっている。岩登りのゲレンデとしては、クライマーにとって最適の効率の良い岩場である。登山の下りコースの途中、花崗岩の岩壁には若いクライマーたちのクライミングの花盛りだった。チョーク袋をさげてクライミングシューズを履いた若者

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。もしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

の主流は、フリークライミングのドロミテ派、情熱ある岩登りは見ているだけで胸がワクワク、高みの見物もまた楽しい。

今回、山と一緒に登ったのは現地の山友達の金忠英さん、大漢旅行社のインバンドのオペレーターで、私とは15年来の山友である。彼は1988年に韓国隊のカンチエンジュンガ西峰(ヤルン・カン)南東面ルートから登頂もしている若いクライマーである。

翌朝、私一人がソウル市内の地下鉄に乗って本屋さん回りをした。ソウル市で本屋さんを見つけたのは大変な苦勞を必要とする。韓国の人々は、読書には感心が薄いようだ。それに伴って本屋さんも非常に少ない。そこで本を探すのに一番よい方法は、地下鉄にある駅のテナントの書店を利用することである。そこで、各駅ごとに乗降して、まず2号線のトムソク駅の

書店で収穫があった。目を皿のようにして探した書は『R. J. Secor DENALI Climbing Guide』。嬉しくてホテルまで待てない。さっそく、電車の中で開いてみた。写真やルート図などを、どの山から、どの位置から写したものを自分なりに解説してみる。

他の2冊の書は、市内の中心部の「大平路」の朝鮮日報社の隣にある「世宗文化会館」で入手した。資料ルームに図書販売部があり、韓国で出版される専門書はおおむね揃えてあるようだ。ここでも長い時間をかけて『The Alpine Journal 2005』『The Himalayan Journal Vol.61, 2005』を見つけて出すことができた。

高タトラ山地の山

吉田博至

会報2月(741)号の「タトラの山旅」を懐かしく拝読し、3度訪れた当地での登山体験を記してみよう。

屹立する岩峰、山上湖、牧草地、樹林、山麓の瀟洒な山岳観光地など美しい所である。山の標高は低

青蔵鉄道・チモランマ・ベースキャンプ・カトマンズ チベット縦走 12日間
10/2 発 ¥458,000



～西寧からラサへ 1956km、ラサからチベットを経てカトマンズ 1000km。チベット大縦走の旅です。

Wee 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

いが岩の部分が多く、日本のように山頂まで歩いて登れる山は少ない。カルパチア山脈の盟主ゲルラホフ(2654^{メートル})、スロバキア最高峰)は、登山クラブ会員以外のガイドレス登山は禁止されている。国境に聳えるポーランドの最高峰リスイ(2449^{メートル})は、山頂まで一般コースがあり、展望の山として人気が高い。

1997年8月、山仲間3人でウィーンから列車に乗り、ポプラド・タトリで赤いタトラ電鉄に乗り換えて山岳観光地スタリ・スモコヴェツを訪れた。ここで187

4年創立の由緒ある高タトリ登山ガイド組合(国際山岳ガイド連盟加入)に行き、ゲルラホフ登山のガイドを依頼した。投宿した湖畔にある山荘は水洗トイレや温水シャワーなどが完備されていて立派だった。

翌朝は快晴、若いガイド(英語堪能)と山小屋を5時に出発し、稜線への取り付きでザイルを結ぶ。難しい箇所にはワイヤーやピトンがあり登りやすかった。遥かなる異国の岩峰の頂に立った喜びは格別であった。登りに3時間半、下りに3時間を要した。

2回目は2001年7月中旬、ポーランドの古都クラクフからバスで山岳観光地ザコパネへと向かった。観光案内所でリスイ登山について聞くと「丸1日かかる。急

峻だが難しくはない」という返答だった。それで単独行にした。

翌朝6時の始発バスで終点のパレニツアへ。ここから登山口のモルスキエ・オコ湖まで10^分ある。乗合馬車があったが、鬱蒼とした森の中を歩いた。湖畔からは急峻な岩稜と鎖場が続く。バスの終点から山頂までは6時間かかり、ザコパネのホテルへ帰着したのは20時だった。

3回目は2006年7月始め、旅の途中スタリー・スモコヴェツを再訪した。スロバキア側からのリスイ登山は容易だが、時期が早く山頂手前のカールに雪渓があるのでガイドを頼んだ。朝5時にホテル前でガイドと9年ぶりに再会、車で出発した。標高1620^{メートル}の登山口まで入る。溪谷へ入ると、

カールの雪渓はカチカチに凍っていた。雪渓を避けるように登る。スロバキアとポーランドの国境稜線上の山頂まで3時間だった。暫く快晴の展望を楽しみ、途中の山小屋でコーヒタイムを取って下山した。ホテル帰着は12時。

スロバキアは日本から遠い国であったが、現在はウィーンから鉄道の便が良くなり、かなり近くなった。物価やガイド料は比較的安い。観光地をベースにしてガイド付き登山を手軽に楽しめる山岳地である。

短歌

東北の山

日暈濃くあらはれ午後のしづけさやサンクラストの峰に真向ふ
緋の色のきはまりと見ゆ五分咲きの大峰稜薄霧の中
沼の波こばいけいさう霧の白簡浄ならむ彼岸浄土も

三脚を据えて夕日を撮りをればわれも冷えたるケルンのひとつ
手抜き知らぬ風神放つ吹雪なりよろけ屈みて木道を行く

逸見征勝

山と氷河の図譜

—五百澤智也山岳図集—

五百澤智也 著/B5判/144頁/2,940円

(カラー63点、2色刷33点、モノクロ33点、計129点の作品掲載)

ヒマラヤと日本の山や氷河の細密鳥瞰図・展望図、地形図、そしてアルプスの山と氷河の水彩スケッチ、さらに日本の氷河地形分布図と日本列島地貌図など192点。全作品に解説付。

〈お知らせ〉*本書の特装限定本を製作中*

五百澤智也が想を新たに装幀デザインした特装限定本/自筆サイン入り/付録に「日本地貌図」の全国図大判一葉を添える。

〈6月刊行 限定150部ナンバー入り 予約募集中!!(定価未定)〉

新刊

〈ナメと滝の織りなす珠玉の溪谷群!!〉

〔関西の沢登り3〕 **南紀の沢** 樋上嘉秀著

南紀の30谷を詳細な遡行図と写真入りで紹介/四六判/248頁/1,995円

〔好評発売中〕 〔関西の沢登り1〕 **台高の沢** 1,995円

〔関西の沢登り2〕 **大峰の沢** 1,995円

日本の登山・スキーの発展を側面から支えた店

好日山荘往来(上)

大賀寿二著/四六判/310頁/2,625円

山とスキー用具の変遷と店の戸をたたいた岳人たちの話。

〒606-8161京都市左京区
一乗寺木ノ本町15

ナカニシヤ出版

Tel. 075-723-0111
Fax. 075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示価格は税込]

“花”の季節に楽しむ!南米アンデスの山脈

アンデス・ブランカ山群トレッキング 11日間

●旅行代金:¥420,000~¥428,000 ●出発日:6/22・7/6発

南太平洋の山旅

タヒチアン・ハイキングと伝説の島・イースター島 8日間

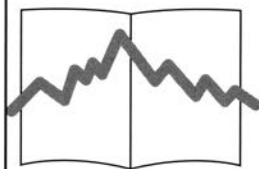
●発着地:東京・大阪 ●旅行代金:¥576,000~¥590,000

●出発日:6/19(火)・8/28(火)・10/9(火)

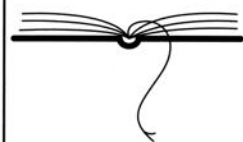


国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 東京府商工振興会
アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com



図書紹介



青山千彰・著

『山岳遭難の構図—すべての事故には理由がある』



2007年1月
東京新聞出版局刊
A5判 157頁
定価 1785円

危険は登山の属性であり、危険にあっても山で死なないことが登山の要諦である。しかし、どのように避けようとしても遭難事故は後を絶たない。登山はその山行目的に応じてさまざまなリスクを負う。そのリスクを予め想定し、危険に備えて山に入るのは遭難防止には重要なことだ。そのため最近では携帯電話を装備として持参する人も多いだろう。

ところで、その携帯電話が普及して安易に救助を要請するために

遭難事故数が増えていると言われるが、本当だろうか。著者はそんな曖昧な議論はしない。徹底してデータによって、事故発生状況・要因を分析する。著者の基本的態度は、あるがままに事故を分析しその時に何が問題であったのか、事故の原因と対策を冷静に見つけ出すことにある。これが本書の特徴ともなっている。

本書の構成は、第1部は「データが語る山岳遭難事故の諸相」、第2部は「道迷い事故を減らすために」となっている。本書の内容については第1章で述べられているように警察庁データから山岳遭難事故の特徴と経年変化、事故の要因とメカニズムの徹底的な検証である。そのことから天気の良い日に事故に遭う死者数だけで言えば、この50年間に毎年200人前後とほとんど増加がみられないことなどが明らかにになる。

旧来言われてきた雪崩、クライミング、冬山など厳しい環境下の事故は必ずしも増加しておらず、むしろ大部分の事故は加齢による道迷いから事故に至るものだという事実が示される。

この単一原因で突出している道迷いを防げると、遭難数は相当に減るとして、第2部にその要因と対処法が提案される。そこで提示される「道迷い防止13訓」は極めて有用だ。どうすれば道迷いが防げるのか—著者が提案するPLP法—現在位置の確定法、そしてヒューマンエラーの詳細は本書で読みたい。

難をいえばデータを重視する余り、全体が学術論文的に過ぎる点であろうか。そのため本当は本書を読んでもほしい人、道迷いを防げないで事故に遭ってしまうような人には結局この手の本は読まれな

いのではないかと危惧する。

本書は2005年「山の危機情報論」として『岳人』に連載したものを中心に学会などで発表したものをまとめたもの。土木工学会の著者は危機情報論専門の大学教授、「道迷いの実験」で知られる。

(絹川祥夫)

石岡繁雄／相田武男・著
『石岡繁雄が語る氷壁・ナイロンザイル事件の真実』



2007年1月
あるむ刊 446頁
四六判 定価 2415円

井上靖の『氷壁』は読んだことがあっても、そのモデルになった遭難を記憶している登山家はもうほとんどいないだろう。今日、当たり前のように使われているナイロンザイルには、日本山岳会も一方の当事者となった長い苦しい歴史が秘められているのである。朝日新聞記者だった相田は、取材で知り合った石岡とともにナイロンザイル事件に取り組んだ。本書は豊富な資料を元に、そのすべてを明らかにする。

1955(昭和30)年の正月、前穂高東壁の冬季初登攀を目指していた三重県の「岩稜会」パーティのナイロンザイルが切れ、大学生が転落死した。当時、登山用ザイルは麻製に代わってナイロン製がはじめていた。1トン以上の力をかけても切れないという触れ込

みであった。だが、岩にかけたザイルは体重がかかったとたん、何の衝撃もなく切れたのだ。

大学生の兄で、「岩稜会」会長の石岡繁雄は登山家であり、応用物理学の専門家であった。麻より強いはずのナイロンザイルがなぜ切れたのか。この疑問が石岡の製綱業界、学会、日本山岳会に挑んだ戦いの発端である。

石岡は自ら実験を繰り返し、ナイロンが岩角に弱いことを突き止めた。だが、製綱業界、学会、登山界の「権威」の壁は厚かった。彼らは逆に、使用法にミスがあったと流布したのである。その間にもナイロンザイル切断による遭難が相次ぎ、多くの登山家の命が危険にさらされた。

日本山岳会関西支部長の阪大教授がメーカーの工場で公開実験をして45度の「岩角」でも切れないことを見せた。教授は日本山岳会刊行の56年版『山日記』に「ナイロンザイルは90度の岩角で麻より4倍強い」と書いた。

だが、実験に使われた「岩角」はあらかじめ、1ミリの丸みがつけてあったことが明るみに出る。メーカーと教授の間で仕組まれた

実験だったのだ。石岡らは教授を告訴するが不起訴になる。度重なる追及に教授は「実験に使ったロープは航空機、船舶の曳航用であった」と苦しい言い訳をする始末であった。

「岩稜会」の仲間や三重県山岳連盟などの支援で、石岡はさらに独自の実験を重ね、遂にナイロンザイルが岩角に弱いことを国に認めさせ、世界初の登山用ザイルの安全基準が設けられたのである。頑なな日本山岳会も『山日記』の公開実験に基づくナイロンザイル強度を訂正した。前穂高東壁の遭難から、実に21年が過ぎていた。

教授は日本山岳会の表舞台にも一度立つ。89年に支部の活動などを理由に、名誉会員に推挙されたのだ。石岡や東海支部、その他反対意見も多かったが受け入れられなかった。後世はこれをどう評価するか。企業のモラル問題と合わせ、本書は極めて現代的テーマを突きつけている。

(四手井靖彦)



『小島烏水 版画コレクション』 山と文学、そして美術

監修・横浜美術館



2007年1月
大修館書店刊
B5変型判 223頁
定価 2299円

先ごろ横浜美術館で行なわれた「小島烏水 版画コレクション展」の図録。小島烏水という稀有な山岳人・趣味人の広範な世界を知る大きな資料になっている。「小島烏水という生き方」雪山行、「コレクター小島烏水」沼田英子、「横浜と小島烏水」近藤信行、「小島烏水と浮世絵」新藤茂、「自然美の発見と近代水彩画の興隆」新畑泰秀の巻頭の論考はいずれも充実。浮世絵から西欧の各種版画まで烏水収集品のほか、本展特別出品作も十分に味わえる。

なお、烏水と版画の関係については、すでに沼田英子著『小島烏水 西洋版画コレクション』(平成15年6月、横浜有隣堂発行、2400円)がある。綿密な考証でその世界を詳述、読み応えのある一級資料である。
(大森久雄)

図書受入報告 (2007年4月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
なるほど知図帳日本編集部(編)	日本のひみつ(地図屋しか知らない?なるほど知図Book)	207pp/19cm	昭文社	2007	出版社寄贈
根深誠	ヒマラヤにかけける橋	277pp/20cm	みすず書房	2007	著者寄贈
日本山岳会青森支部(編)	白神山地ブナ林再生事業報告書(100周年記念事業)	251pp/30cm	日本山岳会青森支部	2005	発行者寄贈
滝本幸夫(編)	北海道中央分水嶺踏査 余話	146pp/21cm	日本山岳会北海道支部	2007	発行者寄贈
岩崎元郎	はくの新日本百名山(朝日文庫 No. い—63—1)	411pp/15cm	朝日新聞社	2007	著者寄贈
Bernadette McDonald	I'll Call You in Kathmandu—The Elizabeth Hawley Story	253pp/24cm	Mountaineers Books	2005	購入



4月理事会

日時 19年4月11日 18時30分

20時30分まで

場所 日本山岳会会議室

【出席者】平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・賛田・石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・石橋・古野各理事、竹中・内田各監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】藤井・渡邊理事

●審議に先立ち、平山会長より今回から平成19年度に入った。間もなく総会が開かれ、新役員が運営することとなるが、しっかりとした引継ぎを行いたい旨の発言があり、議事録署名人を左記のとおり選任し審議に入った。

【議事録署名人】大蔵・野口各理事

【審議事項】

1. 平成19年度第1回通常総会議案について

(1)平成18年度事業報告(案)

(2)平成18年度収支計算書(案)・正

味財産増減計算書(案)・貸借対照表(案)・財産目録(案)

(3)平成19年度除籍対象者

(4)創立100周年記念事業特別会計中間報告(案)

以上について総務担当吉永・財務担当賛田各理事より説明があった後、竹中・内田両監事の監査報告がなされた。監査報告では、特に会費納入状況の管理及び棚卸資産の管理の徹底についての改善指摘があり、平成19年度より管理法等を具体的に検討する事とした。

(承認)

2. 平成19・20年度役員・評議員の選任(案)について

平山会長より、評議員会における議論、常任評議員との打合わせ状況及び前回の理事会の議論を踏まえて、既に会長として推薦することが決定している宮下秀樹氏と、数回に亘る面談・打合わせを行った。今まで、副会長・理事・監事・

評議員候補としてリストに上がっている方々の中から、新会長の運営方針に協力していただけるであろうという観点を重視して候補を検討して戴いているとした上、副会長として神崎忠男氏及び鰐坂青氏を、監事として深川安明氏及び竹中彰氏を各々推薦(案)としたい旨の発言があった。

これに対し、理事・評議員候補リストの一部に入れ換え要望があり、本日の理事会の議論を踏まえて平山会長が宮下新会長候補と再度面談し、来る4月21日開催の評議員会に会長を除く役員・評議員の推薦(案)を提案することとした。

3. 「支部長」交代(平成19年度より)について

(1)広島支部⇨種村重明氏(No.60)

53)⇨杉村功氏(No.1267)

2)

(2)京都支部⇨横田明男氏(No.68)

48)⇨塚本圭一氏(No.4482)

(承認)

4. 「千葉支部」及び「茨城支部」設立について

●千葉支部：設立同意・入会93名
設立同意・非入会46名。設立非同意3名。

●茨城支部：設立同意・入会17名。
設立同意・非入会9名。
設立非同意0名。(以上、いずれも、平成19年4月11日時点)

以上により、茨城支部について入会者を20名以上(支部設立並びに運営に関する規定)第3条)とすることを条件として承認することとなった。

(承認)

5. 写真掲載許可願(有)ハユマ「日本史有名人物辞典(仮称)(PHP研究所発行)掲載の高地でのウェストン夫妻の写真

(承認・有料)

6. 後援依頼：日本登山医学会

6月2～3日 第27回日本登山医学会シンポジウム(於：宮城県蔵王町)の後援

(承認)

【報告事項】

1. 新役員についての会長経験者・前副会長との懇談会(会長)

去る3月15日に開催、今までの理事会及び評議員会における議論の内容を報告した。特に、新会長の意向を十分に勘案した選任とすべきとの発言があった。

2. 評議員会について(会長)

去る3月17日に開催、平成19・20年度新役員について宮下秀樹氏を新会長候補として総会に推薦す

ることに決定した。一部の評議員より、副会長・理事の選任については、新会長候補の意向を重視すべきとの発言があった。

3. カパディア名誉会員講演会について(吉永)

4月6日、東京地区、58名が参加。4月7日、名古屋地区、56名が参加。4月8日、金沢地区、67名が参加。海外委員会、東海支部及び石川支部の協力を得、各々、講演会終了後、懇親会を開催した。

なお、4月6日の東京地区の開催に先立ち平山会長より「名誉会員章」を授与した。

4. 土曜懇話会(田邊)

4月7日、第3回目を開催。平林副会長による、「エヴェレスト登山とヒマラヤ鉄の時代」と題した講演を行ない、32名の参加者があった。

5. 「会員名簿」登載の可否に関するアンケート結果について(吉永)

昨年10月の平成18年度年次晩餐会の案内に同封して名簿登載の可否に関するアンケートを実施した。結果は次のとおり。

回答総数 4205名。登載希望 3114名(74・1パーセント)。一部登載希望 822名(19・5パーセント)。

内訳：氏名・住所のみ 5115名、氏名のみ 275名、一部希望(明記なし) 32名、登載希望しない 191名(4・5パーセント)、無回答 78名(1・9パーセント)。現在、全会員から回答を戴いたわけではないが、全体の24パーセントの方が一部の登載ないし登載を希望しないとの結果であり、「会員名簿」の発行の扱いについては今後、継続して検討する必要がある。

6. 「百年史」発行について(平林・吉永)

創立100周年記念事業の一環として行なった『百年史』が完成、3月29日納品された。検収の後、4月1日より会員への送付を開始した。

なお、会員外の送付先については、創立100周年記念事業に寄附して戴いた法人(約20社)を加えることとしている。

7. 平成19年度事業計画・収支予算の届出について(吉永)

3月10日開催の平成18年度第2回通常総会において承認された平成19年度事業計画及び収支予算を3月30日文部科学大臣に届出、受理された。

8. 「社団法人 日本山岳ガイド協会」新会長就任について(吉永)

去る1月23日、新会長として谷垣禎一氏が就任された旨通知があった。

9. 4月度入会者29名

ルーム日誌 4月

2日	緑爽会
3日	図書委員会 アルパインズ ケッチクラブ
4日	事業委員会 山岳地理クラブ 101会
5日	アルパインフォトビデオクラブ
6日	財務委員会
7日	土曜懇話会
9日	総務委員会 アルパインズ キークラブ 01会
10日	二火会 アルパインスケッチクラブ 九五会
11日	理事會 山想俱樂部 休山会
12日	100周年記念事業委員会 青年部 山の自然学研究会
16日	総務委員会 資料映像委員会
17日	山研運営委員会 インターネット小委員会
18日	三水会 緑爽会 つくも会
19日	科学委員会 アルパインズ キークラブ
21日	評議員会 山想俱樂部 01会

23日 高尾の森づくり実行委員会
25日 常務理事会 麗山会
26日 自然保護委員会 山遊会
4月来室者607名

会員異動(4月)

物故

澤井増夫	(10927)	06・9
安達春雄	(1825)	06・11
早乙女緩次	(3828)	07・3・27
太田章雄	(11856)	07・4・3
椿居義男	(10878)	07・4・4
樋口清明	(4483)	07・4・5
中村静雄	(2414)	07・4・16
千葉保之	(7444)	
坂井久光	(7967)	京都
長沢愛喜	(9502)	福島
藪内徹男	(9670)	関西
藤堂保	(10241)	京都
渋谷千秋	(10534)	
伊藤一弘	(11196)	福島
石川貴上	(11226)	
本田榮三郎	(11512)	
武田任夫	(12228)	
田中良一	(12792)	京都
木村博行	(13098)	宮崎
八谷和彦	(13786)	北海道

山研利用料金の改定について

山研運営委員会

利用料金の改定

① 会員、それに準ずるもの 3,000円(団体扱いは、2,500円)
 会員に準ずるものとは

- 会員の配偶者とその子供
- 団体加盟の会員
- 学生部加盟大学山岳部
- 支部会友
- 海外山岳団体
- 本会職員

② 非会員 4,000円 ③ 中学生 1,000円

④ 小学生以下 無料

ウィークデー割引

祝祭日前夜を除く月曜日から金曜日夜の利用については「ウィークデー割引」を適用。

① 会員、それに準ずるもの 2,000円 ② 非会員 3,000円
 (注)ウィークデー割引と団体割引は併用できません。

訂正：会報1月号の会務報告に記載の

会員の配偶者・家族を→会員の配偶者・その子供に
 ウィークデー割引で、月曜日夜から金曜日夜の利用を
 →祝祭日前夜を除く月曜日から金曜日夜の利用に

訂正します。なお、この適用は会報『山』5月(744)号の
 発行日翌日よりの利用申込みからとさせていただきます。

今年度も11月上旬のクローズまで、会員の皆様のご
 利用をお待ちしています。

第9回「秩父宮記念山岳賞」の推薦について
秩父宮記念山岳賞審査委員会

第9回「秩父宮記念山岳賞」の推薦(他
 薦のみ)を下記の通り受け付けますので事
 務局まで資料をご請求下さい。
 多数の推薦をお待ちしております。

対象分野 ■ 登山活動
 ■ 山に関する文化活動

提出先 日本山岳会内
 秩父宮記念山岳賞事務局

締切り 平成19年8月末日



個人手配旅行から人気のトレックツアーや
 エクスペディションのアレンジまで。充実
 度が違う「旅」のプランニングをこころがけ
 ています。山旅などあらゆるジャンルを取
 り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
 (国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
 大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
 名古屋/〒464-0807 名古屋区千穂区東山通り5-113 オーグラビル6F TEL 052-788-2422



◆総務委員公募のお知らせ

総務委員長 神崎忠男

新年度を迎え、総務委員会では新たに委員を若干名公募します。委員会の中でも総務という会運営に重要なセクションです。使命感の強い方の応募をお待ちしています。応募はハガキ又はFAXで次の事項を明記の上、6月11日(月)必着で事務局気付・総務委員会までお送りください。

- ①氏名 ②会員番号 ③住所 ④電話・FAX番号 ⑤メールアドレス ⑥総務委員に応募の動機。

*応募いただいた方には、後日、説明会の案内をお送りします。

◆第23回全国支部懇談会のお知らせ

岩手支部

今秋、宮澤賢治が歩いたイーハトーブの山々を訪ねてみませんか。
期日 10月6日(土)～7日(日)
会場 岩手県 八幡平ハイッ
日程 ■6日(土)受付15時、講

インフォメーション



演16時、懇親会18時30分

■7日(日)山行 Aコース11源太

ヶ岳、Bコース11姥倉山、散策

コース11焼走り溶岩流ほか

費用 1万6000円

定員 200名(会場の都合により、先着順)

申込期日 7月31日厳守

申込方法 ①支部一括の場合:各

支部長に連絡のうえ、所定の振

込用紙で送金する。②個人の場合:

合:左記あて必ずハガキで申

し込む(折り返し、栞と振込用

紙を郵送)。

*いずれの場合も、山行希望コー

スは、所定振込用紙に記載する。

申込先 (☎023-0403 奥州市胆沢区若

柳字甘草203 小野寺方、全

国支部懇談会事務局

問合せ 岩手支部事務局

FAX 0197-4613498

*申込者には、計画書を後日郵送

します(9月上旬の予定)。

◆フィルム・アーカイブス作品上映会

資料映像委員会

1977年、「日本K2登山隊」

(日本山岳協会主催)の記録映画。

総勢500余のポーターを従えて

バルトロ氷河を行く大キャラバン。

垂直の氷壁にすべてを賭けた男た

ちの闘いの壮挙をくまなく描いた

ヒューマン・ドキュメンタリー。

日時 6月22日(金) 18時30分より

上映 「白き氷河の果てに」(DVD

版 123分)

場所 山岳会104号室(会場の

都合で先着40名)

*入場無料

◆探索山行「戸隠・飯縄に山岳信

仰の原点を訪ねる」科学委員会

日本の登山のさきがけになった

山岳信仰を理解するため、飯縄信

仰のメッカを訪ね、戸隠山麓を訪

問し、飯縄山に登ります。

日程 6月23日(土)24日

定員 40名(定員に達し次第締め

切り)

集合 6月23日(土)7時20分、池

袋駅西口東京芸術劇場前

解散 6月24日(日)20時頃、集合場

所と同じ

交通 往復チャーターバス利用

宿泊 戸隠小舎

費用 1万8000円(交通費、
保険料、宿泊費)
申込 向野暢彦あて(FAX 0449
2213403
☎mukuno44@ybb.ne.jp)

◆編集後記

●『日本山岳会百年史』の刊行について、その成り立ちから課題までを松田雄一委員長に書いていただきました。編集委員の高齢化など、その苦勞が偲ばれます。今後の日本山岳会を考えるうえでも、貴重な資料に仕上がったと思います。編集委員の皆様、ほんとうにご苦勞さまでした。

●大型連休もすぎ、爽やかな季節になりました。連休後半は槍ヶ岳に行つたのですが、若い人が少しずつ増えてきたようで、ちよつとうれしくなりました。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 744号

2007年(平成19年)5月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社